

## 中年期の親の発達に関する一考察 — 家族関係と個人の発達の関連を中心に —

石原 美智恵

### <問題と目的>

今日、青年期にある子供の自立に際して親子の分離が健全に進まず密着した親子関係が持続される現象が増加していると言われている。家族の臨床的問題を理解する際、一つの家族発達段階から次へと移行するときに生じる障害であるとみなすことが一つの重要な鍵となることが指摘されている (P.Barker, 1993)。Cater, E. A. & McGoldrick, M. (1980) は家族発達段階論を提示し、子供の立ち上がり移行が起こる第5段階の主要課題の一つとして「親子関係を成人同士の関係に発達させること」を挙げている。この親子関係の質的転換とも言うべき現象は、日本においては落合・佐藤 (1996) が青年の心理的離乳過程として青年一両親関係の発達プロセスをモデル化している。それによると、青年期の親子関係は親が子供を抱え込む関係である第一段階から、子供が親から信頼・承認されている親子関係 (第四段階)、親が子供を頼りにする関係 (第五段階) を経過しながら心理的離乳へと向かって発達の的に変化していく。しかしこの変化を遂げることがどのような要因と関わっているのかは明らかではない。またこれまでの青年一両親関係研究の殆どは青年を対象としており、親にとってはどのような現象であるのかも明らかではない。また家族関係についての研究は子供の発達に与える影響を論じたものが多いが、家族関係と親の発達の関連については非常に少なく、柏木ら (1994) は幼児の両親の「親となることによる発達」を研究しているが、関係性からもたらされる親の発達については明らかでない。そこで本研究は、親子関係が質的变化を遂げることがどのような要因と関わっているのかという問題について臨床場面ではしばしば指摘される夫婦関係に着目し、青年後期にある子供と中年期にある親の親子関係と夫婦関係の関連について主に検討する。また現在の夫婦・親子関係と関連する要因として親自身の心理的成熟度と原家族における関係も合わせて検討する。更に、親子の関係性からもたらされる親の側の発達にも注目し、親子関係の質的变化を遂げたことからもたらされる親の成長・発達についても探索的に検討する。

### <研究 I >

目的：順調にいけば親子関係の質的变化を遂げている時期にあると思われる青年後期の子供と中年期の親の親子関係の様相と合わせて両親の夫婦関係、親自身の心理的

成熟度、原家族関係を測定することで、親子関係の質的变化に関わる要因を検討する。

方法：19歳以上の青年とその両親の3名を一家族とし、筆者及び筆者の家族の友人・知人を中心に郵送による質問紙調査を実施。回答の得られた97家族 (青年の年齢幅は19~30歳 (平均24.3歳)、男子青年36名、女子青年61名) を分析対象とした (有効回答回収率82.2%)。

【調査内容】①親の原家族における親子・夫婦関係尺度：Anderson et al. (1992) の家族システム分化度尺度 (DIFS) をもとに奥野 (1999) が翻訳・作成したDIFS日本語版を用いて、親の原家族における夫婦・父子・母子間の分化度を測定 (親が評定)。「分化度」とは原家族において個人が情緒的に結ばれているという感覚を持ちながら、同時に分離した感覚を維持できるような家族内の相互作用パターンを表す概念である。②親の心理的成熟度尺度：エリクソン心理社会的段階目録 (EPSI) により、8つの心理社会的発達課題の各下位尺度得点及びその合計の全体得点を測定 (親が評定)。③現在の夫婦関係尺度：菅原ら (1997) のMarital Love Scale (MLS) により配偶者に対する愛情度 (親が評定) を、またDIFSを用いて夫婦間の分化度 (子供が評定) を測定。④現在の親子関係尺度：親子関係の質的転換の指標として、落合ら (1996) の「親子関係項目」より「親が子を頼りにする親子関係」・「親が子を抱え込む親子関係」の2因子を選出し、親・子それぞれが評定。その際親用質問紙では、落合ら (1996) では子供の立場から関係を記述していた項目のワーディングを親の立場からの記述に変換し、「子を抱え込む関係」項目中親が回答するのに不適切な1項目を削除し使用。また親子間の相互作用パターンである分化度をDIFSで測定 (子供の評定)。

### 結果と考察：

1. 親の原家族関係との関連；他の各尺度について、親の性別×原家族における両親 (祖父母) の夫婦サブシステム分化度 (高・低群) / 親の性別×原家族における親子サブシステム分化度 (高・低群) の二要因の分散分析をそれぞれ行った。また各尺度間の相関係数を母子・父子間別に求めた。親の心理的成熟度について原家族の夫婦・親子サブシステム分化度の主効果が、現在の夫婦間分化度のずれについて原家族の親子サブシステム分化度

の主効果が有意であり、親の原家族における関係が分化していた（親密さを維持しつつも適切な距離を置けるものであった）ほど親の心理的成熟度は高く、現在の夫婦関係においてバランスのとれた関係が見られることが明らかとなった。

2. 親の心理的成熟度との関連；現在の夫婦・親子関係の各尺度について親の性別×心理的成熟度（高・低群）の二要因の分散分析を行った。また各尺度間の相関係数を母子・父子間別に求めた。分散分析では夫婦間愛情度について心理的成熟度の主効果が有意であり、心理的成熟度高群は低群よりも配偶者に対する愛情度が高いことが示されたが、相関結果からはこのような関係が見られたのは母親のみで、父親の場合には心理的成熟度と配偶者への愛情度は関連が見られなかった。父親（夫）の妻への愛情や夫婦関係の持ち方は心理的成熟度に関わらず様々な様相を見せるものなのかもしれない。また「親が子供を頼る関係」の親子間の評定のずれについて心理的成熟度の主効果が有意であり、心理的成熟度高群は低群よりも「親が子供を頼る関係」の親子間の評定のずれが少なかった。

3. 現在の夫婦関係と親子関係の関連；現在の親子関係の各尺度について親の性別×夫婦愛情度（高・低群）×夫婦間分化度（高・低群）の三要因の分散分析を行った。また各尺度間の相関係数を母子・父子間別に求めた。分散分析では親子サブシステム分化度について夫婦サブシステム分化度の主効果が有意であり、配偶者との間でより分化した関係を築いている親は自分の子供に対しても分化した関係にあった。また相関結果から、母子間では母親の夫婦愛情度と親子関係の各変数とは直接相関せず、夫婦愛情度が高いほど夫婦間分化度が高く、夫婦間分化度が高いほど親子間分化度が高い、また親子間分化度が高いほど子の「親が私を抱え込む」認識は低いという関連が見られたが、父子間では夫婦愛情度が高い父親ほど「私は子供を頼っている／抱え込んでいる」という認識が強く、子からも「父は私を抱え込んでいる」と認識される程度が強い、という関連が見られた。母子の場合は夫婦関係が分化しているほど親子関係の質的転換が遂げられ、夫婦間の愛情は間接的な関連であったが、父子の場合は夫婦間の愛情度が高いほど親子関係の質的転換が遂げられていないようであった。このような父母間の相違は、今後、親子がどの程度関わっているかの「関与度」を加味した研究で考察する必要があるだろう。

4. 現在の夫婦・親子関係と親の発達（EPSI各下位尺度得点）との関連；母親の場合は夫への愛情度／分化度及び子供に対する分化度とEPSI下位尺度の「統合性」得点と正の相関が見られ、夫婦・親子関係の質と「統合性」

課題の達成感覚の関連が示された。

#### <研究Ⅱ>

目的：現在の家族関係に至るまでの変化のプロセスに焦点をあて、現在青年後期にある子供の児童期、思春期、そして現在の各時期の家族関係の様相を明らかにすることで親子関係の質的变化を促進する要因を検討する。また子育てを通して親が受けた影響についても検討し、親の発達について考察を加える。

方法：研究Ⅰの質問紙調査において面接調査を依頼し、協力の得られた母親2名、父親1名に半構造化面接を実施。水島（1978）の単純家族図式投影法を併用しつつ各時期の夫婦・親子関係について、また子育て経験から受けた影響および今後の人生におけるその位置づけ、今後の子供との関係についての考えなどを尋ねた。

結果と考察：親子関係の質的転換を最もよく遂げられていたケースCでは子育て期間を通して夫婦ユニットが親子ユニットよりも強固でありつつ父母双方が子供としっかりと関わっており、子育てから親が受けた影響が親子関係にとどまらず他の場面にも汎化し、今後「親」としてではない自分の人生の展望を抱いていた。ケースCほど質的転換を遂げていないケースBやその中間に位置するケースAは子育て期間を通して夫婦関係は悪くはないが子供と直接関わっていたのは母親のみであり、ケースBは子育てから親が受けた影響は他の場面に汎化せず、今後の人生も「親」として子供の存在を前提にするものとして捉えられていた。現在の親子関係の様相に、子育て（親子関係の変化プロセス）を通じて夫婦ユニットが強固であることに加えて両親（夫婦）それぞれが直接子供と関わることの重要性や、「親役割」からの脱却が親子関係の質的变化の1つの鍵となっていること、また「親役割」からの脱却は、親自身に「親」としてではない「個」としての成長や今後の豊かな人生をもたらす可能性がある、という視点が得られた。今後、こういった点について量的データも合わせた検討を重ねていく必要があるだろう。

#### <総合考察>

研究Ⅰからは、原家族における体験の影響は中年期においても見られること、またそれは親の個人的な力（心理的成熟度）を介して間接的に現在の家族関係に影響すること、そして現在の夫婦関係の質は親子関係（質的転換の達成）と関連するが、父母によってその違いが見られることなどが示された。また研究Ⅱからは、子育て期間を通じての夫婦ユニット及び父母双方が子供と関わることで親子関係の変化に影響していること、また「親役割」からの脱却が親自身にも個としての発達をもたらす可能性が示唆された。